

近江伝存の模刻像

はじめに

模刻像の展開要素には二様があります。即ち、宗教的な意味からくるものと、仏師の質低下からくるものです。

12世紀末、源頼朝政権が誕生して武家政治が生まれ、また法然・親鸞などの浄土諸宗派成立は、政治形態と宗教面に在来とは異なった大きな一線を画するものでありました。この新しい時代である鎌倉時代より模刻像は生まれるようになります。

欽明天皇戊午年(538)百濟聖明王よりわが国に献上した像として古くより伝承をもつ信濃善光寺本尊は東国を中心に、寛和3年(987)2月齋然が中国より持ち帰った京都清涼寺本尊は西国を中心にこれの模刻が盛行されるようになります。これは鎌倉時代は浄土諸宗派のごとき専修念仏が受け入れられた時代で、専修念仏の母体は中国にあったにせよ、これをもとにして浄土諸宗派はわが国で、新しく生まれた宗派です。新しい浄土諸宗の教団内に聖徳太子信仰が強く位置付けられたのも、聖徳太子はわが国仏教受容者の鼻祖との考えからであります。このような時代に、わが国に最初請来されたと伝える善光寺本尊阿弥陀如来像が浄土諸宗派の主尊阿弥陀信仰にふさわしい像として、また三国伝来の清涼寺本尊釈迦如来像が仏教の教主像として高く意義付けられて急速に模刻され、信仰を篤くして行ったのは時代性から見ても当然の帰結で、宗教背景を根幹にもつ模刻像であります。

一方専修念仏はその教義を重視して、既成教団が重んじた造仏による功德を否定しました。法然は造像起塔を本願とすれば、富むも

のは少なく貧しいものが多いこの世で、何をもって衆生を救うのか、ただ念仏行こそ衆生を救う唯一のものであるとして、既成教団の造寺造仏を反論しています。この専修念仏思想は平安時代に盛んであった造仏の機会を少なくし、そのために仏師の衰退をもたらし、独創造形力を失って技術の退化を見るようになりました。独創造形力のない仏師の造像は模刻をなすことで終始し、これは仏師の質低下からくるものでした。

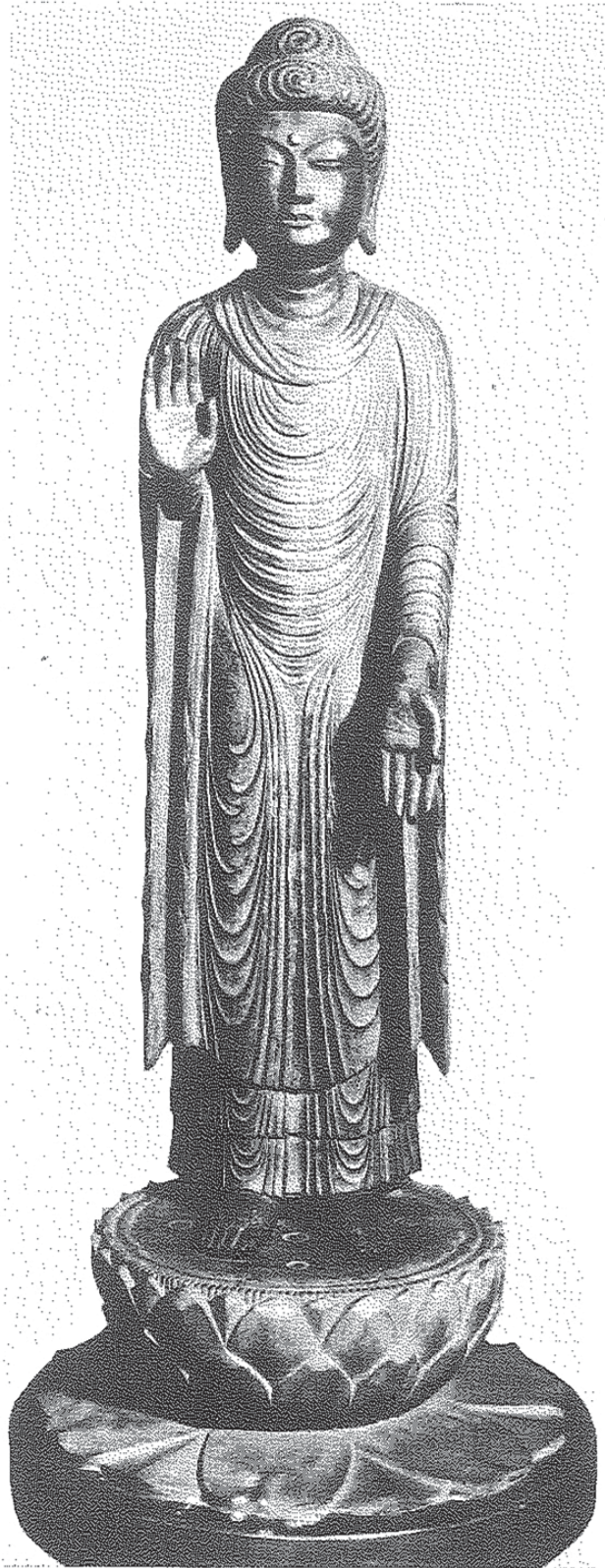
宗教的立場の伝存像

清涼寺式釈迦の模刻は西国を中心に広がっ



善光寺式阿弥陀如来像 園城寺

たので、近江は善光寺式阿弥陀像よりも立派な古い像が多いです。清涼寺の釈迦如来像は天元5年(982)11月宋に赴いた喬然が中国の仏師張延皎と弟延襲をして、雍熙2年(985)7月21日から8月18日までの短期間に中国の



清涼寺式釈迦如来像 延暦寺釈迦堂

瑞像を模刻せしめたもので、寛和3年(987)2月11日に喬然に護持されて入洛しました。この像は像内には絹でつくった五臓まで納入されていて、釈迦瑞像・生身釈迦像と呼ばれて、無類の靈像として篤い信仰を受けました。

この清涼寺釈迦像の現存する模刻作品は、全国で60余軀にのぼっています。近江での遺作は、

延暦寺像 大津市坂本本町延暦寺西塔釈迦堂

園城寺像 大津市園城寺町園城寺食堂

西明寺像 犬上郡甲良町池寺西明寺本堂

莊嚴寺像 近江八幡市安養寺町莊嚴寺本堂

極楽寺像 近江八幡市加茂町極楽寺本堂

の五軀です。この五軀の中で最古像と考えられるのは延暦寺像で、鎌倉初期を降らない作と考えられます。

わが国で清涼寺釈迦像の最古模刻像と考えられているものは、京都の三室戸寺釈迦像です。この釈迦像は園城寺二十五世長吏であった隆明が、承德2年(1098)嵯峨清涼寺の別当に補せられ、在任中に清涼寺釈迦堂本尊を模刻して御室戸寺に安置したもので、承德2年といえば、源義家が院へ昇殿を許された年です。この隆明による模刻は恐らく清涼寺釈迦模刻像の最初と考えてよく、これに端を発した清涼寺式釈迦は、鎌倉時代に入ると浄土諸宗派の崇敬をあつめ、加えて南都律宗の復興運動に当像を打出したので、鎌倉彫刻の特種な一分野をなしました。

いま造立銘があるものでは、平等寺像が建保元年(1213)、西大寺像は建長元年(1249)、唐招提寺像は正嘉2年(1258)、大善寺像は応永2年(1395)となっていて、造立銘のないものでも多くが鎌倉初期から後期の像が大半を占めています。近江伝存の像はすべて鎌倉時代のものですが、延暦寺像はわが国清涼寺式釈迦の鎌倉模刻像中、早期に位置するもので、像の袈裟文様には花圓文が両肩前寄りと、腹部中央・両股部の五箇所に配置されていて、最古模刻の三室戸寺像と軌を一いっにしています。こ



石造善光寺式阿弥陀三尊像 近江町岩脇

の延暦寺像は織田信長が元亀2年(1571)9月比叡山焼打ちののち、文禄4年(1595)園城寺弥勒堂を移して西塔釈迦堂とされたとき、西塔再興の中心人物であった詮舜が高島郡水尾より迎えて釈迦堂本尊とした仏で、延暦寺に造像当初より伝えられた釈迦如来ではありません。しかし近江伝存像であったことには変わりはありません。

清涼寺式釈迦像に対して共に鎌倉彫刻の特色をなした善光寺式阿弥陀如来像は、近江が西国に位置する関係もあって重要な意味付けをするものは少なく、また優れた作品も少ないです。鎌倉時代の一光三尊形態をとる完備された善光寺式阿弥陀像はなく、わずかに石仏として近江町岩脇の竜尾山中にあるもの、絵画では信楽町宮尻の本覚寺画像が共に最古像で、いずれも南北朝時代に位置し、彫像では園城寺像のような近世のものばかりです。しかし光背と両脇侍を失って中尊だけを伝え、不完備ではあるが甲西町岩根の善水寺像は、

▶ 善水寺の善光寺式阿弥陀の像背刻銘



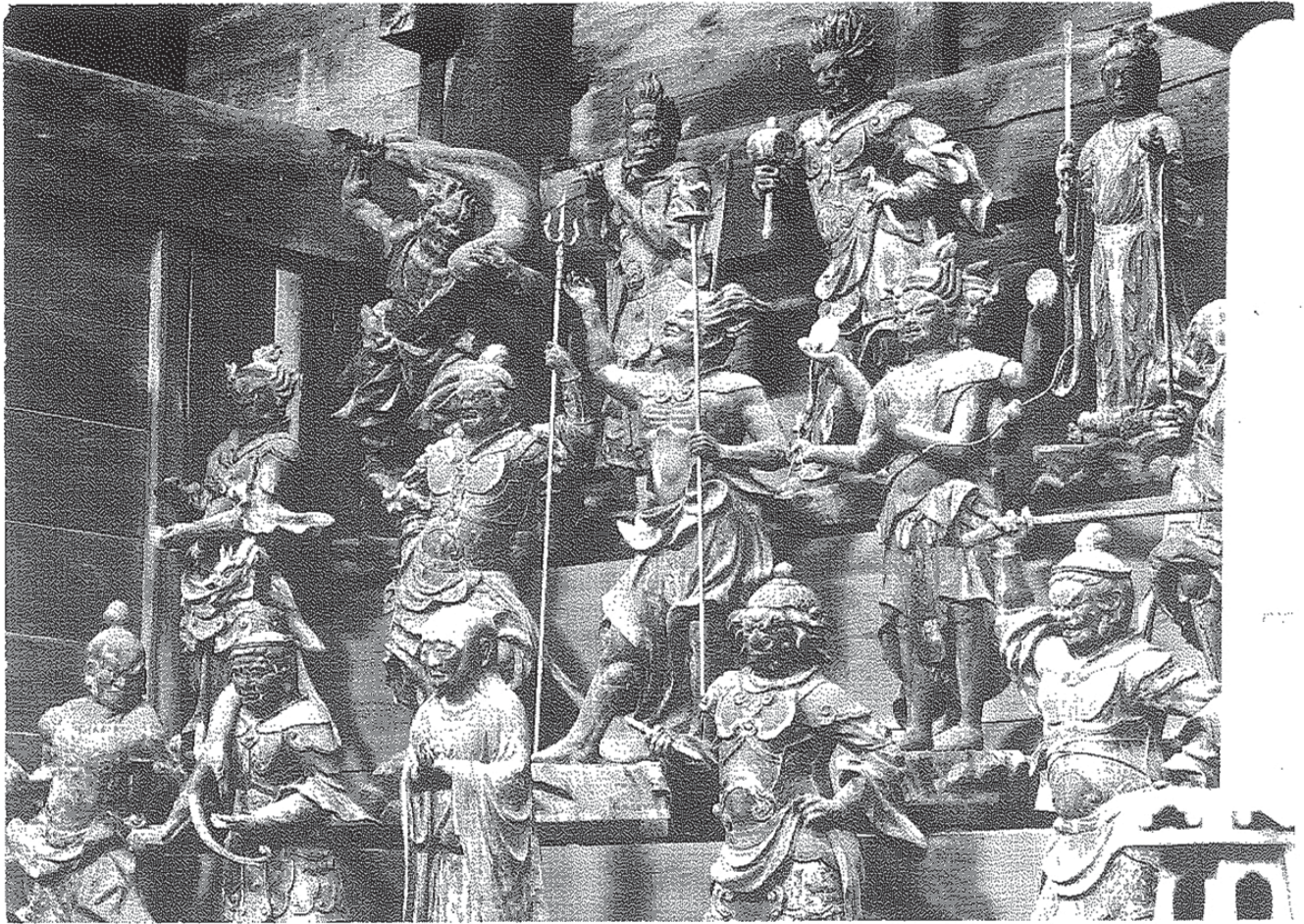
刻銘像としてはわが国最古像で、善光寺式阿弥陀如来像に重要な資料を提起しています。

頭頂より台座に至るまで一鑄した銅造で、両手先だけが別鑄されてます。像背に陰刻で、

奉移 善光寺本仏

鑄師万アミタフ

奉鑄阿弥陀 元久三年 歲次 十月三日
丙寅



二十八部衆像

向かって左

(常楽寺)

本願聖人 善全

とあり、元久3年(1206)に善光寺本尊を模刻した由を刻しています。本願である善全がどのような僧であったのか分かりませんが、造った人は「万アマタフ」と刻されていて、阿弥陀を名のっていることは、浄土往生を願う念仏行者であることが知られます。東大寺大勧進であった重源、また浄土宗を開いた源空の門流には多く阿弥陀を称する人々がいて、仏師にも快慶を中心として多くが知られ、万アマタフもその一人です。阿弥陀を称する万アマタフが善全の依頼によりこの善光寺式阿弥陀如来像を模刻したことは、この時代の宗教的背景をもとにして、阿弥陀信仰の篤い造仏者にゆだねられたことは誠に意義深いといえましょう。

末期仏師の模刻像

専修念仏の思想が世人に強く受け入れられて行きますと、平安後半期に造寺造仏の功德

による浄土往生の考えは薄らぎ、造仏が廃れて行きます。確かに鎌倉初頭の東大・興福二大寺の再興は仏師にまたとない造仏の好機会をあたえて、運慶・快慶のごとき巨匠を生み出しましたが、浄土諸宗派による念仏行の民心への浸透は、六字名号を書いた掛け物、また来迎阿弥陀像一尊を描いた仏画を道場に垂下することで足りるようになります。仏の世界を丈六仏であるとか、群像を立派な堂舎に安置して美々しく具現化し、拝仏によって仏法の教義を会得し帰依するというようなことはなくなってしまいました。

永仁2年(1294)高野山常喜院の像高41センチメートルの小像である地藏菩薩像を院修・院湛・院唱・院亮の四大仏師が造立していることは、造仏の機会が少なくなっていったことを裏付ける早い例です。

造仏事業が少なくなると、自然と職場の争奪がはげしくなり、仏師は集団の組織力によ



二十八部衆像 向かって右 (常楽寺)

って自分の身を立てようとしします。すなわち
 仏所の成立です。仏所の用語が見える早い例
 は11世紀後半の法勝寺金堂造営記に見えます
 が、この仏所は奈良時代の官営造仏所に近い
 臨時的なもので、組織力に頼って仕事をしな
 ければ身を立てることのできなかつた仏所で
 はないのです。

三条仏所・七条仏所・大宮仏所などと呼称
 される仏所成立は矢張り13世紀後半、特に14
 世紀に入ってからで、造仏機会の減少は優れ
 た仏師の養成を大きく阻害したのです。この
 ような時点に模刻像が生まれてきたのです。

肖像彫刻などは生前の人の姿を写しだすの
 であるから、代表的な肖像があればそれを次
 つぎと模刻するのは当然であって、本県に所
 在する慈恵大師像であるとか、近江八幡市莊
 厳寺の空也上人像など鎌倉時代の肖像は、い
 まここで述べている模刻像の範疇には入りま
 せん。

末期仏師の近江伝存模刻像で代表的なもの
 は、甲賀郡石部町常楽寺二十八部衆・同郡甲
 西町善水寺本堂後陣所在の二天像などです。

常楽寺二十八部衆は像内に徳治3年(1308)
 延慶3年(1310)正和元年(1312)正和3年(131
 4)の造立銘があり、加えて二十八部衆造立勸
 進状1巻が常楽寺に伝えられています。二十
 八部衆造立勸進状は勸進僧名を欠きますが、
 延慶元年(1308)6月18日に記されたもので、
 広く造立助成の勸進を行っています。造立に
 関与した仏師は像内造像銘記より、永賢・覚
 □などであったことが知られ、上座仏師は永
 賢でした。

この二十八部衆は京都蓮華王院(三十三間
 堂)の模刻です。蓮華王院は後白河法皇の本
 願によって草創され、堂内に一千一躰の千手
 観音像が造顕されましたが、建長元年(1249)
 3月23日、堂と共に炎上し、百有余躰を残し
 て他はすべて失いました。やがてまもなく再

興が始められると、運慶の子である湛慶が上座仏師として仕事にたずさわり、湛慶が去ると法勝寺九躰阿弥陀像再興の仕事をしていた隆円が上座仏師のあとをつぎ、蓮華王院千躰千手観音像の再興には当代の優秀な仏師がほとんど参加しています。蓮華王院の再興は、東大、興福両寺再興につぐ鎌倉彫刻史上の重要な出来事であります。

二十八部衆は千手観音像の護法像で、建長元年炎上のとき一部の千躰仏とともに取り出されて難を逃れました。このことは『一代要記』にも記されています。蓮華王院の落慶供

養が行われたのは長寛2年(1164)12月17日のことで、二十八部衆は12世紀後半すなわち平清盛が権力を誇っていたころに出来たものです。常楽寺は天台宗の名刹で、本尊千手観音像の護法像である二十八部衆を造立するに際して、天台門跡寺院妙法院の一堂である蓮華王院の明朗な張りのある力強い二十八部衆を模したことは決して不自然ではありません。

善水寺二天像は、善水寺内陣四天王像を14世紀前半頃に模した像です。善水

寺本尊薬師如来像は正暦4年(993)の像内納入結縁交名記があり、その護法像である梵天・帝釈天・四天王像も本尊と同時の作で、わが国10世紀彫刻の数少ない作年代の判明する重要彫像です。この10世紀末の四天王像のうち2軀を模刻したのが善水寺二天像で、この二天がどのような理由で造立されたかは史料を欠きませんが、恐らく寺内に新堂が建立されて、その本尊の護法像造頭に本堂の四天王を模刻したと考えてよいでしょう。

しかし常楽寺と善水寺の両模刻像は共に基本になった像に対比すると、像形は近いが彫法は萎靡沈滞していて、既にもととなった像に見られる張りのある力強い表現は失われ、14世紀仏師の力量の弱さを如実に知らされます。ここにわが国彫刻史の一端が見られるので、このほどに2件のこの彫像は歴史的意義が深いと言わねばなりません。

むすび

以上見てきたように鎌倉時代は仏教に大きな変革が見られて、いままで仏教の進展につれて見られてきた仏教美術も、変動があらわれるようになります。中でも仏像彫刻は南北朝時代を境として急速な低下をなし、室町時代に入ると仏画と共に美術的価値を全く失くしてしまいます。そして新しい禅宗の画僧の手になる水墨画、猿楽にもとをなす能楽の仮面など従来になかった文化が生みだされます。能面の確立は仏師の手になるものではなく、能の心得ある人によって、幽玄の美を表現し、表情を特定なものに固定せずに、一つの面で長い時間演能する関係から、いままで見られなかった中間的表情を面に表現しました。

天正9年(1581)に造立された西教寺開山堂安置の真盛上人像は、体部は仏師増村家久が作っていますが、頭部は越前の著名な面工である出目次郎左衛門尉の手になっています。これはこの頃の仏師は実在人物の顔の表情すら彫れなかったことを語っているといえます。(宇野茂樹氏提供)



銅造善光寺式阿弥陀如来像
善水寺